

# 音楽科

## 高校「音楽Ⅰ」における効果的な鑑賞指導

米田 潤一

**【抄録】** 種類雑多の音楽が氾濫している現代において、如何に正統的な伝統音楽の良さを再確認させるか、これは、我々音楽教育に携わる者に課せられた、焦眉の急を要する重大な責務である。それには、音楽においても正邪の立て分け、偽物と本物の聞き分ける感度の良い耳を育てることも大切になってくる。その最初の入口として如何に取り組むべきか、そして発展させていくのかをまとめてみた。

**【キーワード】** クラシック、バロック、ジャズ、リピート、アダージョ、右脳、オペラ、ロック

### 1. はじめに

音楽とは、文字通り、「音」を「楽しむ」と書いて音楽と言うように、五感の中の重要な一つである耳からの「聴」が大きな役目を担っている。

その「聴」の代表が鑑賞ということになるのだが、鑑賞の持つ意義の重大さは言及するまでもない。

極論すれば、たった一つの名曲が、その人の人生を左右してしまうことも珍しくないのである。

もっと極端なことを言えば、生まれる前から変えることも可能なのである。

例えば、胎教の重要な要素の一つとして、その子の健全な発育を促す栄養素として「良い音楽」を与えていくという考え方が世の中の風潮としてあるように思われる。

それでは、「良い音楽」とは、どういう音楽のことを言うのか。これは、杓子定規に定義づけることが困難であるが、一つだけ言えることは、世間一般の人が聞いて、特別、苦痛に感じることもなく、それどころか、寧ろ、心に安らぎを覚え、「天上からの音楽ではないか?」とさえ錯覚するような音楽のことを言っているのではないだろうか。

最近、そういうことで、いろいろなおもしろい実験が行われているようだが、綺麗に咲いたチューリップの花に、ピバルディの「四季」で代表されるようなバロック音楽を聞かせたものと、片や、「バロック」から「バ」の字を取った、大音響の騒々しい「ロック」を聞かせたところ、所謂、クラシックと言われている方のバロックを聞かせた方は、益々、色鮮やかに美しくなったのに比べ、ロックをガンガン聞かせた方のチューリップは、何と、驚くなかれ、枯れてしまったのである。

植物だけでは、不十分であるという訳で、動物にも同じ実験が行われたが、結果は全く同じであった。

バロック音楽を聞いて育った乳牛は、美味しく栄養価の高いミルクを豊富に搾乳できたが、ロックを聞かされた牛は、悲惨にも、乳腺炎になってしまったのである。

最近では、亡くなった世紀の巨匠、指揮者のカラヤンの演奏からプロデュースされた、「アダージョ」が大変なブームとなったことも記憶に新しい。「アダージョ」とは、イタリア語の音楽用語で、意味は、「ゆるやかに」という、遅いテンポになる。

何故、このような、ゆっくりとした、遅いテンポの音楽が世の中の人々に、今、必要とされ、要求されているのだろうか。それには、いろんな理由が考えられるが、その中の一つとして、上記のようなロックが氾濫して、人間の心も、チューリップの花のように精神が攪乱され、殺伐としてきてしまったためではないだろうかと思像する。

しかしながら、人間は、本来、本能的に、美しいものにあこがれ、煙が上へ々と上昇するように、音楽も、殺伐とした心を癒してくれる、また、魂を清浄化してくれるような音楽を希求するように、本当の自分が目覚めてきたのではないかと推測される。

前置きが長くなってしまったが、以上のような視点からも、精神的、また、体力的に立派な人格が形成される高校の「音楽Ⅰ」の鑑賞指導は、極めて重要であると言わざるを得ないのである。

### 2. 鑑賞の導入

音楽の授業とは、本来、楽しい授業であるべきはずのものだが、生徒の中には、音楽が「音が苦」になっているものが多い。そういった先入主観を如何

にして払拭するかが、当面の重要な課題になる。

それを洗脳する最も有効な手段が、いろいろ工夫した方法による鑑賞ではないだろうか。

歌唱や器楽でも効果的なやり方は、いろいろ考えられるが、それらは、個人的な能力や、嗜好の違い等でかなり困難な面が予想される。

しかしながら、鑑賞においては、聴く耳さえ持っていれば誰でも容易に可能なのである。

そこで、まずは、導入がとても重要になってくるのであるが、その大事な頭に持ってくる曲は、誰でも知っている、馴染みの濃いものであるということは言うまでもない。

それでは、名曲なら何でも良いかということ、高校生という年令的なことや、それに相応しい芸術性も兼ね備えたものであるということ、インパクトのある演奏や指揮振り、といったような諸々の条件を考慮しなければならない。

それらの厳しい諸条件をクリアーできるのが、リッカルド・シャイー指揮、ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団、1984年来日公演でのチェコの作曲家ドボルザークの交響曲第9番ホ短調Op. 95『新世界から』ではないだろうか。

シャイーのほとぼしるような情熱的な指揮、ロイヤル・フィルのそれに十分応えた手に汗握るような熱演と音楽のスケールの大きさは、正に、ドボルザークの面目躍如と言えるもので、完全に聴く者の心を捕らえて放さない感がある。

シャイーという指揮者は、実に毛並みの良い指揮者で、所詮、血統書付とでも言おうか、生まれた時から指揮者になるべくして育ったというような本当に素晴らしい指揮者である。

彼の父は、イタリアの作曲家で有名なルチアーノ・シャイーであると聞けば、自ずと納得させられてしまう。

この演奏は、第1楽章から第4楽章まで全曲通して聴いても十分聴き応えがあり、また、聴いてみたくなるような感覚にさせられてしまう魅力あるものであるが、そこは、前にも言及したように、最初の中は、興味を持たせることが肝要なので、一回の鑑賞時間を制限し、だいたい15分位が限度ではないかと思われる関係上、この曲の一番盛り上がりを見せる、第4楽章〔譜例1〕だけに止めたい。

〔譜例1〕

第4楽章 第1主題  
Allegro con fuoco



### 3. 巨匠による鑑賞曲

前述の「新世界」から始まって、文字通り、高校音楽Ⅰの「新しい世界」の幕開けとなることを祈りつつ1学期に取り上げる、楽しい鑑賞曲を紹介したい。

すでに、趣旨はお分かりのように、音楽史という観点からは逸脱しているが、やはり、オープニングの直ぐあとに聴かせたいというのか、必然的にそうなってしまうというのか、音楽の大本とも言うべき大バッハの作品が登場するのである。

大バッハと呼ばれている、即ち、J.S. (ヨハン・セバスティアン) バッハの作品は膨大な数に上る訳ではあるが、現在、日本で大変なブームになっているパイプ・オルガンの曲で「トッカータとフーガ」ニ短調BWV. 565〔譜例2〕が最も相応しいものであろう。



パイプ・オルガンという楽器は、何億円とかかる高価な楽器で、日本では数える程しかなく、余り一般的ではなかったが、このところの経済発展の御陰で、あちらこちらのホールに備え付けられるようになってきた。勿論、バッハのオルガン曲も俄然脚光を浴びるという図式である。

こういった現象は、日本独特の珍現象と見るべきか音楽的レベルの向上を意味しているのか判断に苦慮するところであるが、何れにしても、我々にとっては、諸手を挙げて歓迎せざるを得ない。

本来ならパイプ・オルガンというものは、教会に備え付けられたもので、敬虔な信者が神に祈りを捧げる時、その想念を向上させる大切な役割を担う神の音霊として用いられた。従って、当時としては、パイプ・オルガンの音楽、即ち、天上の音楽なのである。

まあ、その辺の宗教論はさておいて、信仰心に欠如している日本人としては、バッハのパイプ・オルガンの曲を聴いて、その瞬間だけでも、純粹無垢な気持ちになるのもまんざらではないのかも知れない。

この曲は、アニメやコマーシャルで有名になっているので生徒の心を引きつけるということもあるが、それ以上に、この曲の持っている崇高さ、荘厳性、そして神秘性がやはり大きいのではないだろうか。

これこそ、いろんな演奏があるが、やはり何と云って  
もフランスの女流オルガニスト、マリ・クレール・アラ  
ンが最も正統的で真摯な解釈は、好感度抜群である。

次に、バッハから一変して趣向をかえてみたい。演奏  
している曲はバロックから現代まで様々であるが、演奏  
形態が大変珍しいリコーダーとアコーディオンの二人組、  
「ケンブリッジ・バスカーズ」というグループである。

「バスカーズ」とは、「辻音楽師」とか、「大道芸人」  
という意味で、文字通り街頭で演奏していたが、素晴  
らしいテクニックと、ユニークなキャラクターが評判  
となって、次第にコンサート活動を行うようになった。

もうすでに、デビューしてから10年以上になるの  
で、メンバーが代わったり形態が変わってきたよう  
に見受けられるが、最初に日本にやってきた時のメン  
バーで、リコーダー、フルート担当のマイケル・  
コプリーと、アコーディオン奏者のデビッド・イン  
グラムのコンビが最高に楽しい。

リコーダーという楽器は、日本では小学校や中学  
校で必修の教材になっていて、全員の生徒が必ず履  
修してきているものなので、とても馴染みが深い反  
面、多分に食傷気味といったきらいがなきにしもあ  
らずといった楽器だが、マイケルのテクニックは抜  
群で、目を見張らせるものがある。中でも、ベートー  
ベンの交響曲第9番ニ短調Op. 125『合唱付き』の第  
4楽章、アラ・マルチア（行進曲風）に〔譜例3〕は、  
テノールのソロで有名などころであるが、マイケル  
は、二本のリコーダーを一度に演奏して、一人でリ  
コーダー二重奏を見事にこなしている。これには生  
徒ならずとも驚嘆させられる。

〔譜例3〕

Ten. Solo

sei - ne Son - nen flie - gen, froh wie sei - ne Son - nen flie - uen durch des  
おーお ぞら たーかくあまたの たいよーのーとびかい

ヘルベルト・フォン・カラヤンは、今世紀最後の  
巨匠と言われている指揮者であるが、なるほど、198  
1年もうすでに16年も前の来日で、手兵、ベルリン・  
フィルハーモニー管弦楽団を指揮したベートーベンの  
交響曲第5番ハ短調Op. 67「運命」は、出色の出来  
ばえである。

第1楽章のところは、余りにも有名で、耳にたこが  
できるほど聴いているので今またここで聴く必要はな  
〔譜例4〕

#### 第4楽章 第1主題

Allegro

(Tutti) *ff*

いであろう。しかし、第2楽章からは、これが以外  
と聴く機会がないのではないだろうか。かと言って  
第2楽章からではやや長くなるので、第3楽章から  
位が妥当であろう。

この交響曲は、第3楽章から第4楽章〔譜例4〕  
が続けて演奏されるように作曲されているので、事  
実上、三つの楽章のように見受けられる。

カラヤンは、ただ音づくりだけでなく、映像的な  
面も音楽表現には不可欠の要素であるという考え方  
から、視覚的にもとても斬新な工夫がなされていて  
ユニークである。普段、テレビで見ているオーケス  
トラのコンサートとは違った陰影の使い方をしている、  
確かに魅力的である。流石に、カラヤンは、ジェット  
機の操縦もしていたこともあるだけあって、機械に  
強いということは言われているが、天才的でさえあ  
る。

#### 4. ジャズとクラシック

ジャズという音楽は、ルーツは黒人の音楽で、余  
り上品な音楽ではないと誤解されがちであるが、ジ  
ャズの持っている特有のリズム感、即興性というも  
のは、あの前述の、バッハのリズム感、神秘性とい  
うものと共通するものがある。その一つの証左とし  
て、バッハは、即興演奏（アド・リブ）の大家でも  
あった。当時作曲家の一つの条件として、即興演奏  
ができることが重要であった。

「トッカータとフーガ」の「トッカータ」という言  
葉の語源は、イタリア語の「トッカーレ」という言葉  
からきていて、その意味は、「触れる」ということで音  
楽の方では鍵盤楽器の即興演奏を表現していた。

クラシックの音楽家の中で  
も、ジャズに感心を寄せたり、  
実際に演奏したりしている人  
も多い。例えば、ピアニスト  
のフリードリッヒ・グルダ、彼はウィーンのピアニス  
トで、伝統的な古典派の音楽、モーツァルトとか、ベ  
ートーベンを得意としているが、ジャズ分野でも傑出  
した才能を発揮している。それから、指揮者として活  
躍しているアンドレ・プレビンもジャズ・ピアニスト  
として有名である。ことごと左様に、現代では、ジャ  
ズとクラシックは相即不離の関係にあって、全く切り  
離しては語れないのである。

日本を代表する世界的な指揮者、小沢征爾もジャズ

に理解を示している一人で、つい最近、現代ジャズ・トランペッターの第一人者であるウイントン・マルサリスと共同で、小、中学生を対象とした音楽教室的なビデオを制作し、オン・エアされた。子供を対象にしたものであるが、高校生は勿論、我々大人でも十分楽しめる作品である。ビデオは次の三部作である。(注1)

- 第一部 リズムが基本
- 第二部 吹奏楽
- 第三部 一に練習 二に練習

第一部では、チャイコフスキーのバレエ音楽「くるみ割り人形」〔譜例5〕が使用されている。この曲をただ単に演奏するだけでは効果が半減するが、ウイントン・マルサリスの超一流のジャズにアレンジされた「くるみ割り人形」との演奏とを対比させて、とても興味深いものとなっている。

〔譜例5〕

行進曲

Tempo di marcia viva

Cl.  
Tp.

第二部は、お馴染みのアメリカン・マーチ、ジョン・フィリップ・スーザの行進曲「星条旗よ永遠なれ」〔譜例6〕が、小沢征爾の、これも大変珍しいプラス・バンドを指揮した演奏と、ジャズの最初のスタイルと言われているニューオーリンズのデキシラランド・ジャズ・バンドとの競演でとてもユニークで魅力的な音楽教室である。

〔譜例6〕

5. オペラ (歌劇)

クラシックの中でも教材として取り上げることの難しいのが、オペラではないだろうか。

本校においても、エア・チェックした有名なオペラ

〔譜例7〕

闘牛士の歌(活気のあるスペイン的な民族色にあふれている。)

Allegro Moderato

To - ré - a - dor, en gar - de! To - ré - a - dor! To - ré - a - dor!

を何本か用意はしているが、ほとんど埃をかぶったままになっているのが現状である。そこで、数年前にLDプレーヤーを購入したのを機に、オペラの「忠臣蔵」と言われている、ビゼー作曲のオペラ「カルメン」のLD版(PILF-7251)を入手した。これは、今更敢えて説明するまでもない、今をときめく「三大テナー」の一人、プラシド・ドミンゴがドン・ホセ役を演じている映画形式のソフトだが、このLDから有名な前奏曲やら間奏曲、「闘牛士の歌」〔譜例7〕などを、ハイライト形式で鑑賞していくと、オペラの醍醐味も満喫できる。

第一幕の前奏曲から鑑賞していったいこうに支障ない訳だが、映像が、のっけから衝撃的な闘牛場の場面でいやが上にも盛り上がりを感じさせる。

ビデオの場合は、頭出しが困難で時間もかかるのが欠点だが、LDの場合は、CDと同じ要領のできるの、次から次と場面転換が可能なのがあるがたい。

次に上げる7曲位を鑑賞すれば、時間的にも内容的にも十分堪能できることと思う。

第1幕 前奏曲

ハバネラ「恋は野の鳥」……………カルメン  
二重唱「母の話聞かせてくれ」  
……………ホセとミカエラ

第2幕 「闘牛士の歌」……………エスカミーリョ  
二重唱と花の歌「お前が投げたこの花は」

……………カルメンとホセ

第3幕 二重唱「俺はエスカミーリョ」

……………エスカミーリョとホセ

第4幕 二重唱「あんたね？俺だ」とフィナーレ

……………カルメン、ホセ、合唱

キャスト

カルメン ……ジュリア・ミゲネス・ジョンソン  
ドン・ホセ ……プラシド・ドミンゴ  
エスカミーリョ ……ルッジェロ・ライモンディ  
ミカエラ ……フェイス・エシャム  
監督 ……フランチェスコ・ロジャー

指揮 . . . . . ロリン・マゼール  
演奏 . . . . . フランス国立管弦楽団

## 6. コミックな音楽

アメリカの喜劇王、ダニー・ケイと言えば、大変な音楽通というか、プロ級の腕前だったことは万人の認めるところである。

映画、「ホワイト・クリスマス」でのビング・クロスビーとの共演、また、ルイ・アームストロングとは「五つの銅貨」で丁丁発止の名演技を披露したことは余りにも有名であるが、彼が亡くなる6年前に、あの世界的な超一流のオーケストラ、ニューヨーク・フィルハーモニー管弦楽団を指揮した演奏はユニークで大変貴重な記録である。

ニューヨーク・フィルハーモニー・オーケストラと言えば、歴代の指揮者の中でも、特に巨匠と言われるような超大物ばかりが指揮していた歴史的なオーケストラである。古くは、亡くなったブルーノ・ワルターの指揮で、マーラーの交響曲の家元的演奏が有名である。その後、やはり亡くなった、ミュージカル「ウエスト・サイド・ストーリー」の作曲者として知られているレナード・バーンスタインが常任指揮者として君臨していた。その頃、若き小沢征爾がその副指揮者として指揮活動を開始したのである。

そういった凄いオーケストラをダニー・ケイが指揮を許されたということは、彼が如何に指揮者としても非凡な才能の持ち主であったかということの証でもある。それも、ただ楽員たちがおざなりに、事務的に演奏しているのではなく、本当に、ダニー・ケイに全幅の信頼を寄せているという感を強く思わせ、また、本当に心から楽しんで演奏している様子が手に取るように伝わってくる、そういうすばらしい感動的なビデオであると言っても過言ではない。

演奏している曲目は、

- ロッシニ作曲 歌劇「どろぼうかささぎ」序曲
- チャイコフスキー作曲 バレエ組曲「くるみ割り人形」より“小さい序曲”  
“中国の踊り”
- ベルディ作曲 歌劇「アイダ」より  
“凱行進行曲”
- ベートーベン作曲 交響曲第5番「運命」より  
第4楽章
- アンダーソン作曲 「おしゃべり」
- ヘラック作曲 「ベニスの謝肉祭」

[譜例 8]

Vivace Opus 34, No. 3. Pag. 32

スーザ作曲 行進曲「星条旗よ永遠なれ」

以上のような曲目は、小学校や中学校で鑑賞する曲であるが、ちょっと工夫して、視点を変えてみると、高校生でも、否、万人に、良いものは年齢に関係なく魂を揺さぶるものなのである。(注2)

さらに鑑賞で大事なことは、リピートすることである。既に生徒達のソウルにインプットされているものを引き出して、さらに栄養分を与えていくことは、音楽の年輪を重ねるという作業には有効且つ不可欠な刺激なのである。

もちろん、星の数ほどある地球上の音楽を、次から次へと与えていくことも大切であるが、それよりもっとこのリピートの効用は大きいのである。それは、あたかも、懐かしい心のふるさとに戻ってきた時のような、何とも言えない暖かい感動を覚えるのである。

## 7. ショパン・コンクール

5年に一回開催されるショパンを記念したコンクールは、ピアニストを目指すものにとっては最大の目標であるとともに、避けては通れない関所となっている。

ショパンの故国、ポーランドのワルシャワで行われるこのコンクールは、「ピアノの詩人」と言われた彼のピアノ曲だけを演奏するという珍しいコンクールでレベル的にもかなりの高さを保持している。

近年、日本人でもこのコンクールに参加して活躍する場面が多く見られるようになってきた。何故か女性のピアニストが多いようだが、中村絃子とか内田光子、最近と言っても、もう10年位前になるが、小山実稚恵といった人がこのコンクールに入賞して、その後世界の檜舞台に登場してきている。その小山実稚恵が入賞した時の優勝者が、ブーニンで、当時、ブーニン・シンドロームとしてマスコミを騒がせた。爾来、このスタニスラフ・ブーニンも世界的なピアニストとして突如として世界の寵児となったのである。

この時の模様が、「NHK 特集」として放送されたが、ブーニンが、並みいるコンクール参加者の縷縷とした演奏が続く中で、突然、稲妻のごとく弾き出した勿論ショパンの「ワルツへ長調」[譜例8]はとても衝撃的でもあり、また、感動的であった。

中でも、コンクールの最終審査の前日にショパンの命日である10月17日を迎えるのだが、その日はコンクールも休んで、ショパンの心臓が納められている、ワルシャワの聖十字架教会に多くのショパン愛好家が集

〔譜例9〕

**Larghetto**

Sop.  
Alt.  
Ten.  
Bass.

La - cry mo - sa Di - - es il - la, Qua re - sur - get ex fa - vil - la,

い、ショパンの遺言であった、「私が亡くなったら、モーツアルトのレクイエム〔譜例9〕を演奏して欲しい」という言葉通りそれが演奏されるシーンは、胸にジーンとくるものがあった。ポーランドの人達が、モーツアルトの「レクイエム」を聴きながら、ショパンに思いを馳せる表情が何とも言えない感動を覚えさせる。

あれから10年位たつ訳だが、この「NHK 特集」は、少しも色あせることなく、現在でも生徒たちに感動を与え続けているのである。

登場してくるショパンの作品も、上記のワルツの他マズルカあり、バラードあり、エチュードあり、最後は、コンチェルト（協奏曲）で審査が行われ、小山実稚恵がピアノ協奏曲第1番ホ短調Op.11〔譜例10〕を、ブーニンが第2番へ短調Op.21を聴くことができ、内容的にもとても充実している。

〔譜例10〕

第1主題

**Allegro maestoso**

8. おわりに

今、正に、20世紀の終末期を迎えようとしているこの時にあたり、新しく幕を開けようとしている21世紀を人類がどのような想いで迎えるのか、その心構えが非常に重要になってくる。

その人間の心の奥底の本当の自分を、美しく、清らかに、謙虚に保つために音楽のもつ役割は大変重要である。天上から与えられた神秘的な音楽を通して我々の魂を浄化させ、天眼を開いてこの地球上を本当の「エデンの園」、「楽園」にしていくことが真の21世紀となる大切な鍵である。

戦後、日本は世界に追いつけ、追い越せというがむしやんなやり方で高度成長をつづけ、「物」や「金」が一番という考えが先行して、人の心がすさんでし

まった。その結果、経済も、医学も、教育も、科学も宗教も何もかもが行き詰まってしまい、異常気象や災害、経済不況等のしっぺ返しを受けることを余儀無くさせられてしまったのである。

いよいよ世紀末を迎えて、ほんの僅かな一部の心ある人が、ようやくこの異常事態に目覚め、大海の水を汲み上げるような作業ではあるが、新しい「エデンの園」、21世紀を迎えるべく準備を開始し始めた。

それが、最初にも触れたように、「アダージオ」の音楽であったり、春山茂雄著「脳内革命」の爆発的な人気であったりする訳だが、その「脳内革命」によると、音楽は、前述のようなこと他に、右脳を発達させる素晴らしい効用があるのだそうである。右脳というのは、ものを考えたり、知識や情報を駆使したりする左脳と違って、余り使われていないそうだが、こと音楽に関しては、右脳に刺激を与えるとても良い特効薬となり得るのである。勿論、自然の音楽、心地好い小川のせせらぎの音とか、森の中の小鳥のさえずり、潮騒の音とかいったものも効果的であることは言うまでもない。

自然の音というと、我々は、直ぐ、ベートーベンの音楽、中でも特に交響曲第6番「田園」を連想する訳だが、さすが、自然をこよなく愛したベートーベンは、直感的にそのことの重要性を知っていたのである。

ベートーベンやバッハ、モーツアルトだけが、音楽であるとは結論付けないが、子供たちが、街の「カラオケ」だけが音楽の全てであると誤解しないような鑑賞教育、芸術的に高貴な音楽を追求できる感度の良い耳を養う鑑賞教育を、今後も試行錯誤しながら研究していきたい。

(注1) ウィントン・マルサリスと小沢征爾  
ソニー・レコードSRVM 1104~5

(注2) ダニー・ケイとニューヨークフィルのタベ  
コロムビアSVVR 8